



タイの「12人姉妹」伝承と映画『プラロット メーリー』

平松 秀樹

1. はじめに

映画『プラロット メーリー』(1981)は、日本に映画留学し円谷英二のもとで特撮技術を学んだソムポート・センドゥアンチャーイ¹⁾による重要な作品である。この作品は、タイ・ラオス・カンボジアおよびビルマの一部地域やマレーシア北部などの東南アジア大陸部に共通して伝わる民話「12人姉妹」を題材として製作されたものである。本稿では映画作品『プラロット メーリー』の内容の分析とともに、その背景となっているタイにおける「12人姉妹」伝承の展開の様相を考察したい。タイでは「12人姉妹」は広く国民に認知されている民話であり、知らない人を探すのは難しい。学術研究としては2017年7月に『12人姉妹——プラロット メーリー研究』²⁾という論文集・報告書が出されている。テレビドラマでも同年にシット・コム版『プラロット メーリー2017』が放映されている。こうした動きは、学界、一般を問わずタイでの「12人姉妹」に対する継続した関心の所在の証左であろう。

2. タイの「12人姉妹」³⁾について

タイの「12人姉妹」は、通常2つのタイトルを持つ。話の前半に焦点を当てた場合は「ナン・シップソーン นางสิบสอง」(12人の女性⁴⁾)、後半に当てた場合は「ブ

ラロット メーリー พระรถเมรี」(プラロットとメーリー)である。ただし、「ナン・シップソーン」という題目でも「プラロット メーリー」という副題が付されるし、その逆も多い。また「ナン・シップソーン プラロット メーリー」と長めのタイトルになる場合もあるし、韻文作品のタイトルなどでは「プラロット」と短くなることもある。

「12人姉妹」は映画化以前に長らく民話として伝承されてきた。2015年に他の有名な民話伝承とともに(無形)文化遺産登録されることとなったが(シラーポーン2015:257)、舞踊のための韻文戯曲になったのはアユタヤ時代⁵⁾であり、その他、さまざまな型式の韻文としての「12人姉妹」が伝えられている。2009年に出版されたタイ芸術局による『プラロット集成』(全539頁)という本には、順番に、「ロットセーン・チャードック」、「カーブ・カップマイ詩形プラ・ロットセーン」、7種の「戯曲プラロット メーリー」、「カムクローン詩形プラロット」、3種の「ニラート詩形プラロット」が載っている。現在のところ、この本を「プラロット メーリー」(または「12人姉妹」)に関する定本と見做すことが一応できよう。しかしながら、散文民話は掲載されていない。パーリ語「ラッタセーナ・ジャータカ」からタイ語に訳された「ロットセーン・チャードック」⁶⁾を除いてすべて韻文である。タイでは中等教育前期で古典文学の韻文学習の一環としてこの「プラロット」の韻文の一部を学ぶらしい。しかし人々のところに焼き付いているのは民話伝承の方である。新王妃がライバルの12王妃の目玉をくり抜き、幽閉された12王妃が自分の赤子の死肉を食らうといった内容を

に指摘されているが、タイの場合は、インド由来の4月から始まる月の数(白羊宮からはじまるインド黄道12宮)としての12の重要性が際立っているように思われる。それぞれの月に特有のキャラクターが存在する。

- 1) 日本ではソムポートと表記する場合もある。たとえば、ドキュメンタリー映画『ソムポート君ガンバレ』(小林應恭監督、2013年)。
- 2) 2017年7月7日にカセサート大学人文学部で開催されたシンポジウムの論文集・報告書。タイの著名画家による主人公プラロットの絵が表紙を飾る443頁からなる立派な本である。シンポジウムはおもに舞踊や歌謡の研究者が中心となっている。同書がカバーしている地域はタイ(各地方)、ラオス、カンボジア、タイ・ヤイ(ビルマのシャン州)である。それ以外にもマレーシア北部、タイ・ルー(雲南タイ族)にも民話伝承が伝わっていることが分かっている。
- 3) 邦訳は以下の本に抄訳が所収されている。江尻英太郎編『ほら貝王子——タイの昔話』所収「十二人の姉妹」、吉川・赤木編訳『タイの昔話』所収「十二人の娘」、森幹男編訳『ものぐさ成功記——タイの民話』所収「十二人の娘」。
- 4) 12が世界の諸地域で重要な意味をもつ数字であることは既

5) 一般の説。アユタヤまで遡る資料根拠は見当たらないと疑問を呈する反対説もある(サオワニット2017:86)。

6) チャードックはジャータカ、ロットセーンはラッタセーナのタイ語訳。「ロットセーン・チャードック」(ラッタセーナ・ジャータカ)に関しては第3節参照。

持つこの民話の原型となると、はるか昔に遡らねばならないであろう。筆者の推定ではモン族のドヴァーラヴァティ(タイ語でタワーラワディー ทาวะระ)時代まで遡源してしまうが、これについてはまた後で述べたい。

タイでは「12人姉妹」にヴァリエーションとして細部の異なる種々の伝承があるが、梗概をここで述べておこう(88ページからの資料3も参照されたい)。

子宝に恵まれぬ長者が、東南アジア独特の短い12本(1房)のパナナをお供えして神(仏)に祈願し、12年連続(?)で毎年子供が生まれる。最近のアニメ作品では、毎年双子で6年、あるいは一度に12つ子が生まれる場合もある。祈願成就したのはいいが、姉妹たちのせいで長者はたちまち貧窮し、姥捨てならぬ子捨てを決意する。この地域に実際にそうした習慣があったかはわからない。子供たちを捨てようと3度トライするが、2度までは末妹パオ⁷⁾の賢さにより失敗し、子供たちが自力で家に辿り着く。3度目は成功する。残してきた目印が雀などに食べられ、12姉妹は森の中を彷徨う⁸⁾。12姉妹は人間に変身した女夜叉サンタラー(サンタマーンetc.)と出逢い、子供の欲しかった女夜叉に養女として引き取られる。実の子同然に大切にしながらかかわらず、12姉妹は夜叉の正体を知って逃亡する。夜叉たちの食べ残した人骨を長女(または末妹)が見つけるパターンが多いが、この正体発見の箇所はいろいろな「味付け」が可能である。カンボジアのリー・ブンヅム監督製作の『12人姉妹』(1968)でのこの場面も面白い。12姉妹は象の腹、牛の腹、馬の腹に匿ってもらいながら無事逃避する。3という数字が非常に大事である⁹⁾。池のほとりのバンヤン樹¹⁰⁾の樹上で休んでいると、王の召使いの水汲みがやってきて、12姉妹を見つけて王に報告する(ここも3回水汲みに来る)。王は12姉妹を気に入って全員王妃とする。

7) 末妹は最も聡明で美しい。末妹の名前のパオ(またはラムパオ)は大阪大学外国語学部タイ人教員のタイ文学定期試験問題に出題された。筆者(平松)は授業で何回も「パオ、パオ」と熱く語っていたため、正答できた学生たちから感謝の辞をいただいた。

8) 「ラッタセーナ・ジャータカ」では、12姉妹が捨てられる因はかつて12匹の仔犬を森に捨てたためであるとしている。

9) 仏・法・僧、前世・今世・来世など、3は貴重な数字である。お寺では布薩堂を3回右廻し、線香も3本立て、仏(陀)像に3度跪拝する。

10) タイ文学では菩提樹、バンヤン樹が大きな意味を持つ。民話ではバンヤン樹が重要アイテムとして出てくることが多い。たとえば恋人が将来を誓うのは、菩提樹は神聖過ぎるためであろうか、通常はバンヤン樹の下である。バンヤン樹には時としては恐ろしい神秘的なパワーが宿っている。民話を元にした映画『傷あと』(邦題、1977年)にはその様子がよく描かれている。

女夜叉はそれを聞いて嫉妬心、復讐心が湧き上がり、より美しい人間に変化してバンヤン樹に赴き、同じように王に気に入られる。媚薬や呪文の効果などもあり、王は新王妃にぞっこんとなって筆頭王妃とし、12王妃をないがしろにし始める。夜叉王妃の仮病の策略で12王妃は目玉をくり抜かれ、洞窟に幽閉される。12姉妹は生まれてきた自分たちの子供の死肉を食らう。末妹だけは、片目が残り¹¹⁾、かつ子供も奇跡的に助かる。子は成長してロットセーンとなる。『パンニャーサ・ジャータカ』(後述)の「ラッタセーナ・ジャータカ」では、このロットセーン王子こそが過去世の菩薩(釈迦)であったと連結される¹²⁾。ロットセーンは超自然児でスーパーパワーを持ち合わせ、賭博や闘鶏に滅法強い。ロットセーンが所有する鶏はインドラ神(日本では帝釈天にあたる)の変化の場合が多い。

ふたたび仮病を装う夜叉王妃の策略で、なにも食べられない夜叉王妃のために夜叉国へ「欠伸するマンゴー・吼えるライム」をとりに行く破目となるロットセーン。天翔ける馬パーチーを得て夜叉の国へと出立する。夜叉の国は「ラッタセーナ・ジャータカ」ではカッチャプラ・ナコンであるが、民話では「向日葵の国」(ムアン・ターン・タウン)とする伝承もある。プラロット国の舞台が後述するタイ中央部のチョンブリーにあったと仮定してみよう。地図で確認すると、「向日葵の国」が東にあるとした場合¹³⁾はカンボジア(クメール帝国)となってしまう¹⁴⁾。夜叉王妃により夜叉語で書かれた書状、「昼についたら昼に食べよ。夜についたら夜に食べよ」を持って遣わされるが、途中で出逢った隠者が読んで気の毒に思い、神通力で内容を「昼についたら昼に歓待せよ。夜についたら夜に歓待せよ。婚姻の儀を行うべし」と書き換える。夜叉国では書状通り歓待され、その国の女王である女夜叉の留

11) 目を抉る女夜叉の手が最後に疲れてしまった等々、片目が残った直接の理由はさまざまである。因果としては、かつて姉たち全員が魚の両目に縄を通して縛ったのに対して末妹は片目だけしか通さなかったためであると「ラッタセーナ・ジャータカ」に説かれている。

12) 連結されるといっても、「ラッタセーナ・ジャータカ」には、他のジャータカ話にあるような現在世の物語部分はない。その他、女夜叉は提婆達多、カンリー(メーリー)はヤショウダラー妃であったと連結されている。

13) 「西」の場合も考えられるが、「欠伸するマンゴー・吼えるライム」の産地としては「東」の方が有名である。

14) カンボジア(クメール)的なものは、伝統的にタイでは呪術、ブラックマジックなどと関係づけられている。有名なプラ・ルアン伝説でもクメール人は地中に潜る「土遁」の術などを使う恐ろしい存在である。ただし一時的に僧形となったプラ・ルアン王の神通力で石にされてしまう。

守を預かる娘メーリー（「ラッタセーナ・ジャータカ」ではカンリー¹⁵⁾）王女と結婚する。夜叉の娘とはいえメーリーは夫に従順な妻である。ロットセン王子は母たちの苦境などすっかり忘れ、妻との幸せに浸る。しかし、天翔ける馬パーチャーに母への忘恩を諫められたロットセンは、妻を騙して酔わせ、その隙に保管されている母・伯母の目玉やその他の宝物を盗んで帰還しようとする。酔いからさめて後を追うメーリーに、夫は盗んだ夜叉国の魔法の木の実（秘薬）を投げつける。木の実は大山、大火、大海¹⁶⁾となって妻を傷だらけにして苦しめる。メーリーはそれでも愛する夫を追う。しかし大海（大河）だけは超えられない。日本の民話にある山姥に投げつけるお札と同じである。山姥同様に「退治」されるメーリーは、和尚に餅にくるまれて食われてしまうのではなく、そのまま夫を思いながら死んでいく。いくら夜叉の娘とはいえ可哀そうと思うのは筆者だけであろうか。さらにタイでは一般に、メーリーは女だてらに酒を飲んで酔っ払ったということで非難の対象となっている¹⁷⁾。

帰還した王子は女夜叉を成敗する。夜叉国から盗んできた錫杖で打擲、あるいは夜叉国に保存されていた女夜叉の心臓を盗み女夜叉の目の前で握りつぶす。いや、普及した伝承では、女夜叉はロットセンから娘の死を聞いて胸が張り裂け卒倒して死んでしまう。娘思いの親である。わが子の死肉を喰らう母達とどちらが残酷かわからない。しかし、「ラッタセーナ・ジャータカ」では、この話の核心は母と伯母たちに対する「ガタンユー」（報恩、親孝行）であると説かれているので、母たちの残酷さはこの民話の主題ではない。ちなみに筆者は、この「ガタンユー」の価値観は現代まで通底するタイ社会における最高善の一つではないかと考え

15) ローマ字表記するとKhanriであるが、ラオス語（北タイ・東北タイ方言でも）ではRはHに転化するの「カンヒー」となる。本書橋本論文を参照されたい。

16) 盗んだ木の実の数と投げつける回数は、3、5、7、12回など様々。「ラッタセーナ・ジャータカ」では7回。

17) タイ古典文学中のヒロインで酒を飲んで酔っ払うのは後にも先にもこのメーリーだけのことである（元チューラーロンコン大学、現タイ・バンクラーブ会長のトリーシン・ブンカチョン先生のご教示による）。インターネット上では、親孝行したいなら泥棒してでも酒を持って来いと自分の幼い息子に命ずるアル中の母親がヒロインのテレビドラマ「トーン・ヌア・ガオ〜純金〜」ทองเนื้อเก้า(2013年、原作は著名な女性作家ポータンによる小説)にメーリーの系譜があるといった意見まで流布している。ネット上の批判は女が酒に溺れると人生に失敗するという内容。「トーン・ヌア・ガオ〜純金〜」に関しては平松2018を参照。メーリーはもともと（赤子の時より）酒のみであったといった説や、酒は一切飲めなかったなど、諸説がある（芸術局2009:22）。

ている。

メーリーは、夫に魔法の木の実を投げつけられられて亡くなる時に、今生ではわたしはあなたのことを想ってこんなにも苦しい運命です。来世では立場が入れ替わって旦那様に追う苦しみ、恋焦がれる苦しみを分かってもらいたい。とって息途絶える。

正確に言えば、タイでは「ナーン・シップソーン」「ブラロット メーリー」の続編として「マノーラー」という日本の羽衣伝説に近似した話を加え、この3つを三位一体の継続した話として取り扱う。天女マノーラー（分類的には「キンナリー」）は池で水遊びをしているところ、狐師に捉えられて王室に差し出される。結婚させられるが幸い王子はよき人であった。ところが王子の留守に生贄として殺されることになったので、機転を利かせマノーラーは羽を取戻して故郷の天の国に帰る。後を追う王子は妻に会うため万難を乗り越えなくてはならない。

3. 伝承の舞台(場所)および「12人姉妹」の伝承の流れ

3.1. 伝承の舞台

カンボジアやラオス同様に、タイ国内にも伝承となっている舞台が存在する。バンコクから車で2時間ほどのチョンブリー県に12姉妹が幽閉された洞窟の候補地が存在する¹⁸⁾。しかし、民話そのものが人口に膾炙している度合いに反して、通常、土地の地名伝説はあまり意識されていないといえる。チョンブリーの洞窟を知る者は少ない（ある会社が洞窟見学ツアーを催しているが、行く人はほとんどいないようである）。他の国と比較すると、「12人姉妹」の民話を自国のものにしようとするこだわりが少ないようにも感じられる。タイの人々は、他のさまざまな民話に関しても、「このあたり」（スワンナプーム地域¹⁹⁾）の「昔」の話であるが、個別の場所までは意識しないようだ。またOTOP（一村一品）でバンコク近郊のチャチェンサーオが「ブラロット印ナムプラー」、チョンブリーが「ブラロット国の地酒」を販売しているものの、知名度は極めて低い。

18) タイ中央部での伝承の候補地。他に北タイのピッサヌローク県や南タイのパッタラン県にもそれぞれ伝承の候補地がある。

19) 「黄金の土地」という意味。サンスクリット語のスパルナブーミに由来。古来、タイや周辺地域を含めたかなり漠然とした領域を指す。ちなみにバンコク新国際空港はスワンナプーム空港と名付けられた。

3.2. 「12人姉妹」伝承の流れ

「12人姉妹」伝承は、元々あった伝承が『パンニャーサ・ジャータカ』²⁰⁾に蒐集され、さらに伝播していったと考えるのが妥当である。『パンニャーサ・ジャータカ』は、300～500年くらい前に現地の僧侶が制作したいわゆる「偽経」とされる。タイではチェンマイの1僧侶(沙弥とする場合もある)がパーリ語で著わしたことになる²¹⁾。現行のタイ語(訳)の『パンニャーサ・ジャータカ』は大きく二種類存在する。ダムロン親王編『パンニャーサ・チャードック』(国会図書館版全61話)は、「タイ歴史学の父」とよばれるダムロン親王が命じて、係員が手分けして各地に残された断片を収集した。「12人姉妹」の話すなわち「ロットセーン・チャードック」(ラッタセーナ・ジャータカ)は第47話に蒐集されており、現在複数の出版社から出されている。もうひとつはビルマに残った『ジンマー・パンニャーサ』である。ジンマーとはチェンマイのことで、『チェンマイ・パンニャーサ・チャードック』(タイ芸術局版全50話)として現在タイ芸術局から出版されているが、「12人姉妹」の話は入っていない。『パンニャーサ・ジャータカ』としては『チェンマイ・パンニャーサ・チャードック』の方がより「正統」という考えもあるが、こちらに収容されていないのは興味深い。

パーリ語で編纂された「ラッタセーナ・ジャータカ」は、何もないところから突如として空想で拵えたのではなく、元々あった「12人姉妹」の伝承を取り入れ、それをもとに当時のお坊さんが説法や教説のためにつくったと考えるのが自然であろう²²⁾。『パンニャーサ・ジャータカ』に所収されている民話的な他の話の多くも同様であろう。

それでは、「12人姉妹」の原型はどのように伝播してきたのだろうか。この問題の解決を採る方法としては〈モチーフ〉を考察することが有益である。前半の「12人姉妹」の部には《鬼が島脱出》、後半の「プラロットメーリー」の部には《手紙の書き換え》《三枚のお札》《魔法の馬》《魔法の馬で鬼が島脱出》などのモチーフ

が抽出できる²³⁾。

《魔法の馬で鬼が島脱出》は、いうまでもなくインド発祥のパーリ語『ジャータカ』第196話にみられる「雲馬本生話」である²⁴⁾。この話はカンボジアのアンコールワットのネアック・ポアンにもみられるそうだが(平等1983:207)²⁵⁾。《三枚のお札》のモチーフは、インドネシア(バリ島、中部ジャワ)・ミャンマー(モーンケン族)にもみられるとのことだが(稲田1993:399-400)、既に述べたように日本民話での山姥に追いかけられる小僧の話の思い出すであろう。《手紙の書き換え》も大事なモチーフであり、インドネシアやインドのパンジャブにもみられる(同書:361-362)。また、《鬼が島脱出》はミャンマー、《魔法の馬》は中国(タイ族)にもある(同書:409、413)。

また、アールネ・トンプソンの「昔話の型」分類AT455《嫉妬深い王妃が姪を盲目にする》での、王の後妻に目を抉りだされるというモチーフが挙げられる。ただし「12人姉妹」の抄訳を収録した吉川・赤木編『タイの昔話』に付された解説によれば、これは南欧と新大陸のみにみられるモチーフで、南欧ではライムとマンガーではなくライオンの乳と踊る城壁を所望となっている(三原1976:367)。

このように考えていくと、インドから種々のモチーフが遠い昔に伝わり、それが時を経て『パンニャーサ・ジャータカ』に蒐集されたと考えられる。ところで、ダムロン親王編『パンニャーサ・チャードック』および芸術局編『チェンマイ・パンニャーサ・チャードック』に共通に所収されている先述の「マノーラー」(スダナ王子)物語は、インド系サンスクリット語經典には複数みられるものの、セイロン系上座部パーリ語經典にはみられない。伝来の特定は非常に困難を極め、現在の学術状況ではまだ不可能ではあるものの(石井1993:257)、ひとつの仮定として、「マノーラー」物語は(根本)説一切有部のサンスクリット語經典とともにモン(モーン)族ドヴァーラヴァティ国(一国ではなく各地分散した小国家の総称とされる)に伝播したと考えることができる。上座部以前に(根本)説一切有部がモ

20) 50(話)のジャータカという意味。

21) 引用される根拠はダムロン親王説である。しかしダムロン説は甚だ怪しいにもかかわらず、批判なくただその説が流布している。この分野で現在最も信頼性のある研究をしているピーター・スキリングによれば、『パンニャーサ・ジャータカ』はそもそも一つに限定できず、各所での種々のバージョンの総称と考えるべきとの見解である(スキリング2005)。大谷大学の「パンニャーサ・ジャータカ」プロジェクトも同様の見解。

22) 現在バンコクにある名利寺院ワット・スタットの壁画に描かれた「ラッタセーナ・ジャータカ」が残っている。

23) モチーフの種類に関しては稲田1993を参考にした。

24) 『ジャータカ全集』(3)第二篇196「雲馬前世物語」(中村1981:16-19)。解説では、このジャータカはジャワのボロブドゥール寺院の浮彫にもマトゥラーの欄楯にも見られるとある(同書:342-343)。この本生譚では「ラッタセーナ・ジャータカ」と異なり雲馬王が菩薩(釈迦)である。

25) 「羅刹女の島から脱出する説話は東南アジア民に愛好され」というと平等は解説しているが、当然ながら東南アジア大陸部では羅刹女の「島」は「森」に代わる。

ン族に伝来し、人々はその教えと民話的伝承を受け取り、それがタイ族に伝わったとした考えを一笑には付せないであろう²⁶⁾。

仮説としては、元々の伝承が複数のモチーフとして、インドから商人・僧侶などを媒介して現在のタイ南部²⁷⁾に伝来し、当時密接な交易関係があったドヴァーラヴァティのモン族に伝わり、それが北方のモン族にも伝播し、やがてタイ族にも受容され²⁸⁾、今から300～500年前のある時、既に伝承されていた「12人姉妹」のヴァリエーションの一つが説法用に『パンニャーサ・ジャータカ』中に蒐集された。ひとたび『パンニャーサ・ジャータカ』に所収されてからは、僧侶による説法そして民間の口承、あるいは文字として記されたバイラン(貝葉)などとともに、さらに各地に再拡散していった²⁹⁾。北タイと通商関係の深い雲南のタイ族にも「12人姉妹」と近似の話があるのはそのためであろう。海から来て山に伝わっていったのではないだろうか。民話伝承の一方、さらに時代が下るとタイでは、洗練されたタイ語韻文としてサムット・タイ(タイ古紙)に記録され、保管されていった。アユタヤ時代には舞踊用の韻文戯曲としても完成された。

4. 「12人姉妹」伝承のタイでの展開

タイでは「12人姉妹」の話自体に複数のヴァリエーションが存在し、現在でもさまざまな形で再生産・再解釈

26) ドヴァーラヴァティ(8、9世紀に文化的最盛を誇ったと推定される)より時代が下ったタイ(シャム)族による北タイのスコタイ朝(13～15世紀)も、教団としての仏教はスリランカ系上座部を採用しているが、民衆レベルの教えでは(根本)説一切有部の教説が伝播していたのではないかの考えもある(チュラーロンコーン大学文学部パリー語サンスクリット語講座チャーンウィット博士の見解)。『パンニャーサ・ジャータカ』自体も(根本)説一切有部の教義と関係が深い。

27) 仏教なども伝来したナコン・シータマラートや(根本)説一切有部が盛んであったシュリーヴィジャヤ王国の碑文の出土が近年確定されたチャイヤ地方。本稿の目的は伝来ルートの確定ではないので、これはあくまでも一つの推定でしかない。今後の研究が俟たれる。

28) いくつかのモチーフはインドからビルマ経由の北方ルートでの伝播も同時に混在していた可能性も大きい。既に述べたように《鬼が鳥脱出》のモチーフを持つ物語がビルマに伝承されている(稲田1993: 409)。ただしこれは「7人」の「兄弟」の物語であって「12人」の「姉妹」の物語ではない。ビルマに伝わった『ジンマー・パンヤーサ』(『チェンマイ・パンヤーサ・チャーダック』)にも「12人姉妹」が所収されていないことも既に述べた。ビルマのタイ族のシャン州にある「12人姉妹」伝承は、雲南のタイ族への伝播などと同様に、タイの「パンニャーサ・ジャータカ」から拡散していったとみる方が妥当であろう。

29) 現在の形でのカンボジアの「12人姉妹」伝承は『パンニャーサ・ジャータカ』から拡散していった可能性が高い。本書岡田論文も参照されたい。ドヴァーラヴァティのモン族と関連した古層レベルでのカンボジアへの伝来の実相は不明である。

され続けている。

そのひとつとして、メーリーの母は人間であるという伝承がある。立派で公明正大な男夜叉と人間妻の間に双子の女の子が生まれた。上の子が女夜叉サンタラーの養女となる。人間妻が懐妊してつわりがひどいときに、女夜叉の国にしかない「欠伸するマンゴー・吼えるライム」を所望する。そのおかげで無事に出産する。子が欲しいものの長らく子宝に恵まれなかった女夜叉は、そのお礼に双子の一人を所望する。メーリーは牙はあるものの素性は人間とのハーフである点は、隣国カンボジアやラオスの伝承との際立った相違ではないだろうか。この伝承は現在絵本に採用されている。ちなみにタイでは夜叉と人間のハーフはよくあるパターンである。タイで最も著名な詩人ストンプーによる名著『プラ・アパイマニー』(バンコク朝初期頃成立)のシン・サムットは、主人公の王子と女夜叉の間に生まれた快男児である³⁰⁾。王子プラ・アパイマニーの妻たる女夜叉ピースア・サムットは現在女夜叉の代表のように扱われているが、実は「12人姉妹」の女夜叉のほうが歴史は古い。

ところで、つわりのひどい人間妻が所望した「欠伸するマンゴー・吼えるライム」มะม่วงพาดมะนาวโห่は、訳文などをみても多くの人が誤解しているが、ライムでもマンゴーでもない一つの果物である。長い奇抜な名前ではあるが、現存する紅いベリーのような果物で、地域によって若干呼び名が変化する(たとえば南部では吼えるライム)。滋養強壮には抜群であるが、そのままでは酸っぱくてジャムなどにしなければおいしくないとのことである。昔は貴重なものであったのか。文献では「欠伸することを知らないマンゴー・吼えることを知らないライム」といったさらに長い言い回しも多い。なぜ「ライム」「マンゴー」なのか定かではないが、二つの言葉ともに酸味を想像させる故であろうか。ところで、先述の東欧民話での《嫉妬深い王妃が姪を盲目にする》のモチーフでは、「ライオンの乳と踊る城壁」を所望とあるが、「乳」「城壁」が二つのものであるのか、それとも同様に実は意外にも一つのものであるのか気になるところである。

さらに、タイ「12人姉妹」の例のいくつかを紹介しよう。映画では、後ほど詳しく述べる1981年作品(チャイヨー映画製作)以前に、1965年にすでに最初の作品

30) ちなみに、その弟スット・サーコーンは主人公王子と人魚のハーフである。天翔ける竜馬ニマンコーンに跨るこちらの弟のほうが一般的な人気は高い。

が別の監督により製作されている。16ミリフィルムであることは確認されているが、現物は未見であり、所在も現在のところ不明である。カンボジアのリー・ブンジム監督の映画『12人姉妹』が1968年なので、それに先駆けること3年であり、カンボジア映画との関係が判明できれば東南アジア映画研究の発展に貢献できるだろう。

タイでは、最近でもテレビドラマ、アニメ、絵本等々、様々な形(見解)で「12人姉妹」が再生産されている。リケーでも演じられる。リケーはタイのチャンバラ芝居とも訳される下町(田舎)演劇であるが、猥褻な会話や場面もあり、即興で演技内容が流れていくことが多いエンターテイメントである。かつてはタイの全国津々浦々でみられたが、最近では都会での上演は激減した。

テレビドラマでは、冒頭で触れた2017年のシット・コム以前に、ThaiTVで放映された2015年のドラマがとりわけ人気を博した。番組と関連した人気歌手のペア(กระแต - กระต่าย อารี สยาม (Kratæ - Kratay R siam))が女夜叉のメイクを顔に施して歌うミュージック・ビデオも独立でヒットし、大学の新入生歓迎イベントなどで振付がマネされて流行した。また、大人から子供までの幅広い層がMVそっくりにかヴァーして踊る自分たちの動画をネットにアップして一般公開して競い合うなど、影響は極めて大きかった。中には、テレビドラマの一話を真似して投稿する長時間演技派もいた。また、奇想天外な民話のドラマ化に強いチャンネル7による2000年版と1988年版の放映でも多くの視聴者を獲得している。放送時間は大抵は日曜朝である。

歌では、上記のアイドル歌手ペア以外にも、初音ミクの曾根崎心中風のMVまで登場している。プラロットとメーリーの悲恋ロマンスは歌の題材に叶っているのであろう。近年に歌われるのみならず、往年の著名歌手たちもそのむかし歌っている。また、ルークトゥン・ヴァージョン、モーラム・ヴァージョンなども存在し、幅広い歌謡ジャンルに取り込まれている。その他、近年はアニメ版「12人姉妹」のVCDが発売され、絵本も何種類か出版されている。

こうして、教科書でならう韻文「プラロット」以外にも、さまざまなメディアを通して人々に浸透し、主人公ロットセーンとヒロイン・メーリーの悲恋ロマンスが記憶されていく。同時に12姉妹や女夜叉の姿もタイの人々のところに植え付けられていくのである。

5. 映画『プラロット メーリー』

(梗概は90ページの資料4を参照)

1981年映画『プラロットメーリー』は、チャイヨー・プロダクションの前身であるチャイヨー映画の製作による。監督はネーラミット、技術監督はチャイヨー・プロダクション創始者のソムポート・センドゥアンチャーイである。既に少し述べたが、ソムポートは奨学金を得て日本の東宝へ映画留学し(1962年)、円谷英二の下で修業して特撮技術を学んだ。ちなみにソムポートは、のちにウルトラマンの面モデルは自分の進言であったとし、そのモデルはアユタヤの仏像であるとしている³¹⁾。有名な映画『ウルトラ6兄弟vs怪獣軍団 หนุมานพบ 7 ยอดมนุษย์』(1974)を製作しているソムポートは、ウルトラマンの著作権をめぐる日本の係争裁判で近年も話題となった。最近ではムエタイ技を使う青い目のウルトラマン・ミレニアムを独自制作している。

議論を呼ぶ話題も多いが、ソムポートが日本で学んだ特撮を導入したタイの映画界における画期的な存在であることに変わりはない。特撮映画『ターティエン ท้าทายน』(1973)『ジャンボーグA&ジャイアント ยักษ์วัดแจ้งพบจิมโม่เอ』(1974)『ハヌマーンと5人の仮面ライダー หนุมานพบ 5 ไอ้มดแดง』(1975)『エリマケトカゲ一人旅 กิ้งก่ากายสิทธิ์』(1985)製作のほか、古典文学『ラーマキエン』(タイ版『ラーマヤナ』)を初めて実写映画化した功績も大きい。敵の矢に倒れたラーマ王子の弟ラクシュマナの傷を治すためにハヌマーンが花をとりに行くシーンなど、『ウルトラ6兄弟vs怪獣軍団』の特撮シーンのいくつかのカットを、映画版ラーマキエンである『The Noble War ศักดิ์ภุมภกรรณ』(1984)にも組み込んでいる。

映画『プラロットメーリー』(1981)もまた、日本で学んだ特撮技術によってタイの民話が現代に生き返った例である。ウルトラマンばりに女夜叉が巨大化する変身シーンは一つの見どころとなっている。巨大化場面では『ウルトラ6兄弟vs怪獣軍団』のなかの白猿神ハヌマーンの変身シーンと比較してみるもの面白い。音響も円谷のウルトラマンシリーズからの音源をふんだんに取り入れている³²⁾。しかし特撮技術ばかり

31) 日本ではアルカイック・スマイルと、弥勒菩薩の表情の混合ということになっているが、確かにアユタヤの仏像の表情にも似ていないこともない。

32) 京都大学東南アジア地域研究研究所山本博之准教授のご教示による。

りに目を奪われてはいけぬ。本映画の独創は他の箇所にある。

この映画では、女夜叉の部下で気が弱く性格のいい男夜叉がキーパーソンとして登場する。男夜叉はテーワダー（神人、天人）により乳房をつけられ、洞窟の幼いロットセン王子を育て、長じてからも後見する。誠実で優しい性格から12姉妹も助けたいと思うが、女夜叉の命令に背くと犬にされてしまうため、直接手は出せない。板挟みになりながらも、間接的に12姉妹を援助し、最後まで重要な役割を果たす。注意して鑑賞すると他のソムポート作品にも「レディーボーイ」がさりげなく登場しているのがわかるが、本作では主役級の重要な働きをする。このトランスジェンダーの夜叉は時折、大切な仏教的訓示を垂れさえる。終劇の場面でも、最後に「カム」(業)の訓示を垂れて、絶対また会おうね、「サワディー・カー、否サワディー・クラブ」といいながら去っていく。ビジュアル的には冴えないものの、何とも「いとおいしい」夜叉であり、言葉通りまた会いたくなってしまう。

もう一つの独創は、上半身裸で、ぽっちゃりとした中年の、こちらも外見がさえないテーワダー（神人、天人）の造形である。スマートで品格の漂う伝統的テーワダー表象とは大きな径庭がある。この異色のテーワダーが、一方では自ら鬪鶏の鶏になり天翔ける馬にもなり、もう一方では男夜叉に乳房をつけてやるなど、大活躍である。民話ではまったく想像がつかない展開であり、映画にオリジナルなキャラクターである。それどころか、本来ならば王子が自分で取りに行くべき保管されてある母の目玉や魔法の薬を、不平をいながらも怠慢な王子に代わって取りにいつてあげるのである。これは現代の若者と過保護な保護者との関係の暗示であろうか。ロットセン王子はメーリーに首ったけでメロメロ状態になり、妻にキスする以外は他に何もしようとしぬ。テーワダーはメーリーと王子のラブラブぶりにうんざりといった不快感を示すが、前世で何か女性関係の「障」となる出来事があったのであろうか。あるいは長い長い天界の今生で恋愛につまずき、あやうく天人五衰する因果であったのかもしれない。

まさに八面六臂の活躍のテーワダーではあるが、最後は王子と乳房のある男夜叉が一緒になってあなたは愛というものを理解しないと責め立てたことに腹を立て、男夜叉の乳房をそのままにして、勝手にしろと男夜叉とロットセンのもとを去ってしまう。それ

ゆえ、男夜叉は今後トランスジェンダーとして生きる運命が定まったのである。

他にも注目すべき点がある。民話では12人全員が王妃に迎え入れられるが、映画では王様が国の伝統では正室は一人しか持つことができぬといて躊躇し、でも側室なら何人でも持てるとの解決策を示す。12姉妹はそれを受け入れて側室として入内する。正妻は一人という現代的価値観の逆投射であろうか。ただし、忘れてはならないのは妾は何人いてもいいと言っていることで、これもまた妻は一人だが愛人の多い現代タイ社会の反映であろうか³³⁾。

映画での女夜叉のイメージ表象も興味深い。人間の姿の時はベリーダンスのような衣装を纏ったセクシー美女として登場する。しかし、ベリーダンス風衣装は独創であるが、セクシー姿は独創とまではいえない。タイ古典文学中の女夜叉が実写化される場合、人間に変化している時は一般には美人であり、他の映画でもセクシー系女夜叉として描かれる（例えば映画『サントーン』(ほら貝王子物語)や先述の『プラ・アパイマニー』の映画化作品など)。女夜叉が人間に変化した姿に対して、本来の夜叉姿の時は色が黒く巨大で牙をもつ醜女姿で描かれるが、こちらの方のイメージの元を辿れば原型は『ラーマキエン』に登場する女夜叉であろうか。

擱筆の前に、本映画で個人的に気になる点を述べておきたい。王子とメーリーのくだりが、本来ならば後世に歌に歌われるほどにもロマンティックであるはずなのに、本作では余りスイートといえないことである。王子はメーリーに夢中になるものの、それはメーリーの部下の夜叉が媚薬を混ぜたせいであり、その後、盗んだ魔法の薬(袋)を妻に投げつける段も、殆ど躊躇なしに投げつける。投げつけようかどうかの葛藤が一秒ほどはあったかもしれないが、あっけなくメーリーを殺してしまう。メーリーが夫を強く想い焦がれるのに対し、王子は妻より母が大切なのである。妻の恩より母の恩の方が圧倒的に大事な価値観として存在する。この点は、母および伯母たちへの「ガタンユー」を説く『パンニャーサ・ジャータカ』の「ラッタセーナ・ジャータカ」の教えと符合している。

「宮廷文学の傑作に対する民衆文学の傑作」(芸術局2009:13)と評される民話「12人姉妹」にまつわる伝

33) 立憲革命(1932)後の1935年「婚姻法」によりタイは一夫多妻から一夫一婦制になった。しかし、結局は現在に至るまで一夫一婦多妾の社会になっただけだとの意見がある。

承と、その伝承を引き継ぐ現代的バリエーションの一つには違いないが、かなり独自の脚色を施している映画作品『プラロット メーリー』(1981)についての考察を、ひとまずここで終えることとしたい。トランスジェンダーの夜叉の登場によって、タイ現代社会の文脈に沿ったタイならではの新しい「12人姉妹」の出現となったのである。

参考文献

【日本語文献】

- 吉川・赤木編訳 1976『タイの昔話』(世界民間文芸叢書第3巻)三弥井書店。
- 石井米雄 1993「東南アジア仏教の民衆化」木村尚三郎ほか編『中世の宗教と学問』(中世史講座第8巻)学生社、253-277頁。
- 稲田浩二編 1993『日本昔話とモンゴロイド：昔話の比較記述』同朋舎出版。
- 江尻英太郎編 1948『ほら貝王子——タイの昔話』(世界昔ばなし文庫)彰考書院。
- 大谷大学企画課 2016「大谷大学所蔵タイ王室寄贈パリー語貝葉写本の世界」2016年3月17日プレス公開資料。
- スキリング, ピーター〔飯部俊也訳〕2005「東南アジアにおけるジャータカとパンニャーサ・ジャータカ」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』(22)、11-74頁。
- 富田竹二郎編訳 1981『タイ国古典文学名作選』井村文化事業社。
- 中村元監修・補註 1982『ジャータカ全集』(3)春秋社。
- 干潟龍祥 1978『本生経類の思想史的研究』山喜房佛書林。
- 平等通照 1983『ジャータカ物語本生活』山喜房佛書林。
- 平松秀樹 2018「タイ映画・テレビドラマ・CM・MVにみる報恩の規範——美徳か抑圧か『親孝行』という名のもとに」福岡まどか・福岡正太編『東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ・国家・グローバル化』スタイルノート(2018年3月)。
- 三原幸久 1976「比較研究上の解説」吉川・赤木編訳『タイの昔話』三弥井書店、334-368頁。
- 森幹男編訳 1980『ものぐさ成功記——タイの民話』(ちくま少年図書館50)筑摩書房。

【タイ語文献】

- กรมศิลปากร บรรณาธิการ(2009) ประชุมเรื่องพระรถ. กรมศิลปากร (芸術局編(2009)『プラロット集成』芸術局)。
- เชียงใหม่บัณฑิตยสถาน(1998)กรมศิลปากร(『เชนマイ・พานิยาสา·ชาวดอก』(1998)芸術局)。
- นางสิบสอง ฉบับการ์ตูน(2015) สกายบุ๊กส์(『12人姉妹カトゥーン版』(2011)スカイ・ブックス)。
- นางสิบสอง วรรณคดีก่อนนอน(2013) สกายบุ๊กส์ (『12人姉妹 寝る前文学』(2013)スカイ・ブックス)。
- ปัญญาสชาดก(2006) สำนักพิมพ์ ศิลปาบรรณาการ(『พานิยาสา·ชาวดอก』(2006)シンラパーバンナカーン出版)。
- ปัญญาสชาดก(2011)สำนักพิมพ์ เพชรกระรัต(『พานิยาสา·ชาวดอก』(2011) ペットカラット出版)。
- รัตนพล ชื่นค้ำ, บรรณาธิการ(2017)นางสิบสอง-พระรถเมรีศึกษา. คณะมนุษยศาสตร์ มหาวิทยาลัยเกษตรศาสตร์ (รัตตนาป๋อน·ตูนคาร์編(2017)『12人姉妹——プラロット เมรี่研究』カセサート大学人文学部)。
- ศิริพร ณ ถลาง บรรณาธิการ(2015) เรื่องเล่าพื้นบ้านไทยในโลกที่เปลี่ยนแปลง. ศูนย์มานุษยวิทยาสิรินธร(ชิราป๋อน·นัตรารัน編(2015)『变化する世界におけるタイFolk Narrative』シリントン人類学センター)。
- เสาวณิต วิงวอน(2017)“บทละครเรื่องรถเสน”รัตนพล ชื่นค้ำ บรรณาธิการ(2017) นางสิบสอง-พระรถเมรีศึกษา. คณะมนุษยศาสตร์ มหาวิทยาลัยเกษตรศาสตร์ 85-115 (ซาอวัตต์·วินว๋อน(2017)「舞踊ロットセーン」รัตตนาป๋อน·ตูนคาร์編(2017)『12人姉妹——プラロット เมรี่研究』カセサート大学人文学部85-115)。

映画

『プラロット メーリー』(พระรถเมรี)、チャイヨ映画製作โรงถ่ายไซโย、(演技)監督: ネーラミット เนรมิต、技術監督: ソムポート・セนด์ウアン チャーイสมโพธิ แสงเดือนฉาย、1981年/タイ/タイ語/121分。